
非常識日常

幻時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非常識日常

【著者名】

NO413F

【作者名】 幻時

【あらすじ】

同じことを繰り返していくような退屈な日常を過ごす暖^{だん}。しかし、その日常は、一通の手紙により一変することになった。

序奏

歌が好きだった。

流れのあるメロディーに乗せられて『届いてくる言葉は、心に染みわ
たつてゆくよ』うだった。

そして、心の支えとなつた。だから、歌が好きだった。

ふと気が付くと、11時を回っていた。

「…もう寝なきゃな…」

僕は電気を消し、ベッドに倒れこんだ。

また、明日がくる。明日が今日になり、また明日がくる。

当然のことだったが、繰り返しているような気分になつていた。

一日に樂しいことは一つか二つ。それ以外は、どうでもいいことだ
らけだった。

こんな日常に、展開なんてない。終わりもないのではないかと思えた。

なかなか寝れなかつた。寝たつて、明日の眠い朝がくるだけだ。

「暖く？早く下りてきなさい」

母の声が聞こえた。

もう朝か…。8時間も寝ていたのに、睡眠というものは相変わらず短く感じるな…。それ故、眠った気がしない…。

時計は十分過ぎだ。もう、あと五分くらい…。

「暖々！学校に遅刻するよーー！」

ん、まだ遅刻するような時間ではないはずだ。と思いまや時計を見ると三十五分過ぎである。

寝すぎた……。

「おお、ヤバい」

「暖々……遅刻はしたらいかんよ——！——！」

「ああ、わかつたつて！」

階段を駆け下り、ご飯を食べ、家を出る。ご飯は抜きたいところだ

に死にやがてになるので、少しでも食べようとしている。

「遅刻だけは、したくない」

そう呟きながら、全力で自転車を引く。

ただでさえ提出物が全くといっていいほど出でていないので、遅刻などしたらもつとひどいことになる。

通学路など無視し、信号も横断歩道もなことこのを突つ切る。

これが先生にみられたら遅刻どころのものでなくなるし、車も走つていて危ないのだが、スリルがあつて何気に楽しかった。

「ああ、大丈夫だ。間に合ひ」

学校につき、急いで靴をはき替えようとした。だが、自分の靴箱の中には一通の手紙が入っていた。

一瞬ラブレターかと思った。いや、本物ではなく誰かのいたずらの一だ。

しかし、その手紙にはこう書いていた。

「5のうらみ、ひかりにかざされたときのじいやはくらやみにつつまれるが、あけたとしのきよしきのときじで、ふたりはうんめいによりこによからきえむ」

…は?

僕はその文章を全く理解ができなかつた。まず、なぜすべてひらがななんだ……。

部分的に、「光に翳されたときの時刻」と「暗闇に包まれるが」と「明けた年の今日そのとき、一人は運命によりこの世から消える」の意味はわかつた。が、文としてつながりにくくし、なぜ一人は運命によりこの世から消えるのかがわからぬ。

もっとわからないのは「5の恨み」だ。普通に意味がわからん。

よくみると「5」だけ奇妙な形をしていた。丸みがない、というか意味があるのか……？

やはり、誰かのいたずらだらうか。それでなければこの文章に何か意味があるのか……？

考えた。時間も忘れて考えた。すると、チャイムが鳴つた。

「あつ、やべつ！ 遅刻！」

もうつい。

僕はこの手紙のせいで遅刻してしまつた……。

第一奏・手紙の正体は？

僕は急いで教室に向かった。

今じの教室では先生が生徒に話をしているひだ。

僕は遅刻したとき、その空気の中に入つてこゝにこつも氣まずい思いをしていた。

が、ビリヤリ今日はその思いをしなくてこゝみつだ。

教室の前までこゝと、教室の中が騒がしい事に氣づいたからだ。

しかし、何を騒いでいるのだらう。

入つてみると先生はおらず、生徒たちが自由に話しあつてこゝ。

僕はとりあえず荷物を机の上に置き、なぜ騒いでいるか聞くことにした。

「どうしたんだ？」

僕は友達の冴輝斗に聞いてみた。

「んーどうて、アレだよ、手紙手紙。皆の手紙にキュー／＼深々でよー」

「手紙？手紙って、何の…？」

「お前も靴箱ん中に入れられてただろ？それだよ」

え、お前「も」

「… うへことは、みんなもひつじるうへ」とか?」

「わうだよ。… 何だ、お前。ラブレターでももらひたかと思つたんか?」

ニヤニヤしながら冴輝斗がこう。

「んなわけねえだろ。」

俺は即否定した。誰かのいたずらのラブレターかとは思つたが、本物とは思つていない。そんなに自惚れてない。それに。

「ラブレターにしひやあ、意味がわからなさすぎだぞ」

「だよな。何なんだろな、あいやあ」

まったくだ。「5の恨み」とか。「5に恨みなんであるわけねえだろうが。それにこの世から一人が消えるって…。どうやって消えるんだろう。手紙が送られた奴の中から一人消えるんだろうか…。

「あ、わうこや、手紙もらつたのって、この組だけか?」

僕は聞いた。

「いや、2年全員らしいぞ。でも、入れたのは誰かわからないうらい。生徒でないことはわかつてゐらしこが」

「ん、なんでわかつてんの?」

「まだ生徒が誰も学校に来てない朝早くに、偶然先生が見つけたんだとよ」

「ほう。じゃあ学校外の誰かのいたずらか。先生がイタズラするわけないし。」

「あ、そういうや先生ど「」にいるの?」

「「」の手紙について今、臨時職員会議中だよ」

まあ、そりやあ会議するわな。もし本当に手紙をもらった人の中から一人消えたら大事だ。

「でも、本当に一人消えると思うか? 泽輝斗」

「思えんね。物体が消えるなんてありえんから。常識的に」

「だよな。でも、なんか意味ありげじゃね?」

「まあ、暗号か何かだとしたら、面白そうだな」

「暗号。そつ思つて考へてはみたが、全くわからない。」

そういう話してると、先生が教室に入ってきた。

「えー皆さん。この手紙の件は、イタズラということになりました。誰のイタズラかはわかりませんが、それについては後々調べます」

生徒たちから、「やつぱりイタズラかよ」とか、「イタズラに決まつてんだろう」などの言葉が出る。

その中の一人が、

「先生、防犯カメラには映つてないんですか?」

と聞いた。

「映つておりません。学校に誰かが侵入した痕跡もありません」

先生がそう答えた。

僕は妙に慎重なイタズラだなと思つた。

「尚、この件に関して、皆さんの保護者には学校側から伝えておきますので、親に余計なことはいわかによつこ。以上。一時間目の用意をして、休憩してください」

それで、先生の話は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0413f/>

非常識日常

2011年1月16日07時37分発行